

整形に整備された百選の棚田の維持保全状況

Preservation and maintenance status of "one of the Top 100 of rice terraces in Japan" whose shape was consolidation

○西脇祥子*, 山路永司*

Shoko NISHIWAKI, Eiji YAMAJI

1. 背景

急峻な山が多く平坦な土地の少ない日本において、棚田や段畑といった中山間地域の傾斜農地は食料生産を支える上で重要な場であり、日本の耕地面積の約4割をも占めている。近年は傾斜農地のある農村景観が注目され一部の傾斜農地は観光地としても賑わっている。一方で、傾斜農地は作業の労力が大きいため農家の高齢化や米の需要の低下が重なり耕作放棄地となってしまう場合も多い。中島(1999)は日本全国に存在する傾斜農地のうち棚田に注目し各地域の基盤情報の現状を「日本の棚田」にまとめている。しかし、観光地化の進展や耕作放棄地の増加によって現在までにその情報は大きく変化していると考えられる。そこで、傾斜農地の情報を最新のものに更新することを目的として調査を行った。

2. 調査対象地域

本研究の対象地域とすべき地域は日本全国に渡るが、まず一步として「日本の棚田百選」の棚田を対象とした。これは積極的な維持・保全の取り組み、国土や生態系保全、景観、伝統や文化の維持・保全のいずれかが優れていることを条件として選定されたものである。圃場を整形することにより維持管理の効率は上がるため、非整形の棚田地域に比べ保全が期待できる点から、特にこの報告では東北地方における整形された6地域に注目した。認定当時、この6地域はいずれも耕作放棄率が10%未満であると報告されている。

3. 調査手法

調査は主に対象地でのヒアリングと各自治体の発表しているデータの整理によって行った。対象となる地域の農家で実際に作業を行っている方あるいは地域住民に話を聞いた。

4. 結果

表1 各地域の基本情報 Tab.1 Basic information of target areas

括弧内は認定当時の情報/ヒアリング時に全地域で圃場の整備を確認できた

	勾配	法面	面積	農家戸数・人数	後継者	保全団体	区画規模
山吹棚田(岩手県)	1/6	土羽	1ha(5ha)	4戸(5戸)	有	地元農家	30×10(m)
沢尻棚田(宮城県)	1/8	石垣	2.5ha(4.1ha)	3戸・3人(5戸)	無	解体	50×10(m)
西山棚田(宮城県)	1/11	土羽	1.2ha(2ha)	2戸(3戸)	無	無	50×10(m)
榎平棚田(山形県)	1/20	土羽	14ha(10.5ha)	28人(34戸)	無	農家・地域内外住民	50×10(m)
大蔵棚田(山形県)	1/7	土羽	2.3ha(3.4ha)	(11戸)	無	農家・地域内外住民	70×20(m)
四ヶ村棚田(山形県)	1/20	土羽	(12.5ha)	20人(109戸)	無	農家・地域内住民	50×10(m)

結果は表1および図1の通りである。対象地域の耕地面積は榎平棚田・四ヶ村棚田を除いて棚田百選認定当時よりも減少している。四ヶ村棚田では地域内の現状の数字が得られなかった。当時よりも耕地面積が増加している榎平棚田の情報は、現地農家より得られた。

*東京大学大学院新領域創成科学研究科 Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo キーワード：農地保全 農村景観 中山間地域

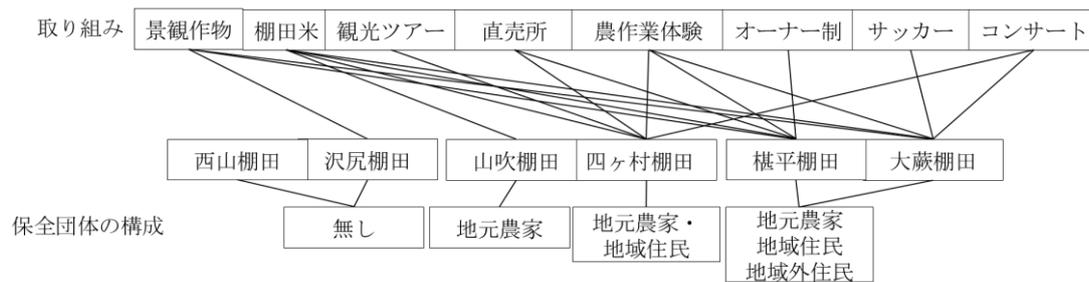


図1 各対象地域における取り組みと保全団体の構成
 Fig.1 Event in each target area and composition of conservation organization

保全活動が活発になったことで地域住民の結束が強まり，“百選の棚田”と認識される範囲が広がったためであると考えられる。

耕地面積が減少した4地域のうち、大蔵棚田では2011年の保存会発足(中地区有志の会:地元農家, グループ農夫の会:地域内外住民のボランティア)以降徐々に耕地面積が回復し、認定当時の耕地面積を目指している。一方、後継者の有無について注目すると、後継者がいるとした地域は山吹棚田のみであった。地域での活動が活発であっても地元農家の次代は育ち難い現状が見てとれる。特に宮城県の沢尻棚田及び西山棚田では保存会等が無い事での傾向は強い。沢尻棚田では農業の担い手が減少し2013年まで存在していた保存会が解散した。現在は地元農家2名の他棚田の存続を危惧した地域住民が退職後個人で農地を借り入れており3人で協定を結び協力して耕作している。西山棚田は棚田百選認定地区の農家3戸のうち1戸が2016年で農業を辞めたことで認定地域の棚田は耕作放棄地が目立つ。

図1は対象地域で行われているイベント等の取り組みと、各地域の保存会の構成を示す。

景観植物は比較的少人数でも実行が可能のため農家の人数が少ない沢尻棚田でも実行が見られる。しかし、農作業体験やコンサートといった外部から集客が必要な取り組みは地域内の人員が不可欠であり、認定地域が広い四ヶ村棚田や保存会への加入者が多い大蔵棚田での実行が確認できた。

米のブランド化は宮城県の2地域を除く4地域で行われている。4地域のうち榎平棚田、四ヶ村棚田では直売会や朝市を行うことでより"棚田米"であることを強調している。地元農家で保存会を形成している山吹棚田では地元デパートでの販売を行うことで地域での認知度向上を狙っている。一方、西山棚田で作られている米は全て自家米である。

認定地域の立地等の条件による取り組みとして、観光地と協力したツアーやサッカーが挙げられる。四ヶ村棚田では付近にある温泉地である肘折温泉と協力し、棚田見学や農業体験等のツアーを開催している。また、大蔵棚田では地元のサッカーチームと協力し棚田でのサッカーや交流会を行い、“モンテディオ米”と名づけた棚田米も販売している。

5. まとめ

保全の取り組みは存在する保存会の活動の規模及び立地等の条件が大きく影響する。保存会の人数が多ければ活動は活発になりやすい。棚田の性質上、地元農家の人数は限りがあり増加は難しいが、地域内外の住民など外部の人間を巻き込む事で人員を増やすこと、棚田周辺の観光要素の利用が活動資金・人材の確保ひいては棚田の保全に繋がると言える。

6. 参考

中島峰広, 1999, 「日本の棚田 - 保全への取り組み - 」, 古今書院. 日本の棚田百選, 一般社団法人地域環境資源センター, <<http://www.acres.or.jp/Acres20030602/tanada/index.htm>>, 2018/04/10 アクセス.